

常なる磐

つねなる いわ

令和2年4月6日(月)号

新年度が始まり、4月1日からの通勤路は、私にとって癒しの時となった。小呂通りを北上し、滝団地北の交差点を右折して県道477号に入ると、景色ががらりと変化することに気づく。美しい景色に導かれるようにカーステレオの音量を下げ、車窓を降ろして耳を澄ますと、風切り音の向こうに川のせせらぎがかすかに聞こえる。県道355号が交わる橋あたりでは、はっきりとせせらぎの音が聞こえる。川の音に耳を傾けるのは、何年ぶりだろうか。

遠くに見える山桜も鮮やかだが、米河内の消防小屋前の桜は見事。思わず車を止めて、自然をたしなむ。桜を後にして車を進めると、さらに見事な桜が現れる。上米河内の桜である。バス停に桜とは、得も言われぬ贅沢である。

そして、左前方に現れる「トキワヒガシ」。小木による文字に身が引きしまる。大自然の景色の中に溶け込む校舎。このような学校に勤務できるのは、本当に幸せ者である。

そして、今日から子供たちが登校する。常磐東小学校、令和2年度の始まり。

新型コロナウイルスという見えない敵の影響で、子供たちは登校の足止めを余儀なくされてきた。日本の各所では休校が継続された地区もある中、感染拡大防止に努め、できうる限りの安全確保に努めた岡崎市、そして常磐東学区に感謝の気持ちでいっぱいである。

5名の新入生を加え、47名の常磐東小学校のスタート。私が年度末の人事異動で新たに赴任する以外、教員をはじめ講師、事務職員、校務員、教員補助者、教職補助員と、昨年度と全く顔ぶれが変わらない。学校をよく知る方が脇を固め、子供たちを導いてくれるほど、心強いものはない。保護者の方、地域の方に「安心してお子様を任せてください」と自信をもってお伝えしたいと思う。

令和2年度 常磐東小学校の目標

- ① 命と安全、健康を大切にします。
- ② 明るくあいさつと返事をします。
- ③ 思いやりあふれるやさしい心を育みます。
- ④ 勉強や運動に粘り強く取り組みます。

子供たちの健全な伸長をうながすために、そして皆様の期待に応えられるよう、常磐東小学校職員一同、力の限り頑張ります。よろしくお願ひします。

※「磐」の意味には、「結びつく」「連なる」という意味があります。常に一枚岩として連なり、揺れにはびくともしない。校長だよりのタイトルには、そんな願ひを込めました。

常なる磐

つねなる いわ

令和2年4月30日(木)号

◇ウメノキゴケ

校内の樹木をぼんやり眺めていて、気づいたことがある。幹の部分が一般的な茶色ではなく、緑白色に見える。近づいてよく見ると、キノコ状のかさぶたのようなコケが付着していることが分かった。付着量は異なるが、ツツジやクチナシの小木から、立派なモクレンや銀杏、黒松に至るまで、様々な樹木に発見できる。特に、春の本校を彩る桜（ソメイヨシノ・荘川桜）に至っては、隙間なくびっしりと。「樹木流コロナか…」と、心配になって調べてみた。

キノコ状のコケの正体は「ウメノキゴケ」。本校にも梅の木はあるが、梅より桜に付くのには理由があった。弱っている樹木に自生するのがウメノキゴケ。さらに、樹木には害を与えていないことも分かった。

気になることがあり、帰路に就く際に上米河内バス停に立ち寄る。大桜には、幹にほんのわずかなコケが見られたが、本校の桜には枝先にまで確認できる。本校の桜が弱っていることが明らかになった。

調べてみて、安心したこともある。この「ウメノキゴケ」は、「大気汚染の指標」。つまり、空気が美しいところでしか発生しないということ。本校の自然環境のよさを改めて知ることになる。

害を与えているものではないと分かったものの、やはり気になる。何かいい手はないかと職員と話していたところ、校務員の山田さんから高压洗浄機が有効だという情報をもらう。早速、コケの除去に取り掛かった。

作業をしながら気づいたことがある。一つは、桜の傷み具合である。「桜は切ったところから傷んでくる」と言われているが、まさにそのとおりだった。

しかし、弱っている桜も黙っていない。ウメノキゴケの間から、新芽を芽吹いていた。この大切な新芽を避けようと流水を当てるものの、時折当たってヒヤリ。しかし、驚いた。新芽はびくともしないのだ。水圧は10キロに迫る激しさがある。それでも、全くびくともしない。生きる力強さがあるのだ。

このとき、桜の新芽と子供たちの姿が重なる。新型コロナの関係で、学校への登校もままならない。子供たちの中にたまった見えないストレスも相当なものだろう。しかし、限られた登校で学校に過ごす姿からは、そうした心配をみじんも感じさせないたくましさがある。二つ目の再発見。子供たちは、まさに、次代を担う日本の宝である。

今は、加藤先生、山田さんの3人で「ウメノキゴケ」の除去にあたっている。コケに覆われていた幹が表れ、日光に照らされた姿を見ると、元気が出てきたようにさえ見える。何より、本校の名物桜に愛着が感じられることがうれしい。

桜の寿命は50年と言われる。本校は移転34年。しかし、あと16年とは言えない。手をかけ、目をかけ、大切にすることで、新芽は芽吹き続けるのだ。

常なる磐

つねなる いわ

令和2年5月14日(木)号

◇ 学校再開に向けて

GWあけの5月11日(月)。児童にとっては10日ぶりの登校であったが、多くの元気な姿を見ることができた。連休後もよい始まりができたと安心する。

本校は4月の臨時休校の再発令以来、月曜日と木曜日の週2日を自主的な登校日として設定した。登校にあたっては、児童が装着するマスクを準備したり、登校日だけでなく平素の体温を検温して記録したりするなど、保護者の方にも様々な協力をいただいている。学校では、手洗いの励行のほか、教室での児童の座席配置を工夫し、窓を開放して十分な換気を確保するなど、現状で出来る限りの万策を講じてきた。

そうした中で、次から次へと感染症拡大防止対策の追通知が岡崎市教育委員会から自分のもとに届く。何通もの通知文からは、国、もしくは愛知県からの通知に従い、岡崎市内の子供たちの安全を最優先にしながら、何とか子供たちに公教育を提供しようと尽力する意図がくみ取れ、教育委員会には本当に頭が下がる思いである。

中でも、5月4日の大村知事による「6月の学校再開に係る分散登校（のちに5月25日からに修正）」の発言よりも2週間も前に「自主的登校日に係る分散登校・時差登校」を各小中学校に指示していた点は、流石と言うしかない。

しかし、この「子供たちの教室内での3密を解く分散登校」は、各小学校で頭を悩ませた。特に「登校時の通学団を分けなければいけないこと」「分散のグループ分け」、さらに「通学団登校の安全性確保の懸念」である。

幸い本校は、全学年とも「分散登校による最大児童生徒数20人以下」の基準を下回っており、岡崎市教育委員会の了解を得て、分散ではなく、通常登校を実施することができている。班長が低学年の児童の歩く速さを考えて班員を先導し、見守り隊の方が寄り添っていただける通常登校が実施できているのは、本当にありがたいことである。

そして、「通学団による全員登校」、さらに「教室におおよその児童が集う環境」という2つの【いつもどおり】ができていることが、学校再開に向けた【子供たちのリズム】を自然に生み出しているのだ。これこそ、最大の準備となる。

皆が、待ちに待った学校再開。
今こそ、【チーム常磐東】。万全の準備と対応で、この難局を乗り切っていく。

常なる磐

つねなる いわ

令和2年5月29日(金)号

◇ あたりまえ

これまで勤務した複数の学校と本校との大きな違いを、毎日、肌で感じている。

「肌で感じるよさ」とも言い換えられる違いのひとつは、本校が「豊かな自然環境に建つ学び舎」であること。そして、それを最も感じることでできる場所を校内に見つけた。常東ランドに面した体育館北側のエリアである。

陽の当たりにくい狭く限られた空間ではあるが、その構造がゆえに常磐の自然を凝縮する風を作る。山側から流れる風は、体育館に当たって方向を変え、勢いを増して西のグラウンド側に抜ける。この時期となっても冷気を含むこの風は、何とも気持ちよく、特に早朝は、豊かな自然特有のさわやかな香りを含む。自然豊かな旅先の早朝の山で肌で感じる風、そのものである。

なるほど、校内でも、緑豊かな自然に直面する場所はここだけ。耳を澄まさずとも聞こえてくる野鳥の鳴き声も近い。中でも、ウグイスの声色は絶品である。

「ホー ホケキョ」はイメージ。実は、いろいろな鳴き方があることも知る。

「ホー—— ホケキョ」 頭の部分が長いと趣に深みが出る。

「ホー—— ホケキョキョ」 この鳴き方が一番多いようだ。

「ホー—— ホケキョ ケキョケキョケキョ」
鳴き方だけではない。音程も様々。まさに、鶯（鶯）十匹十色である。

こうした野鳥のさえずりが、あたりまえのように普通に聞こえる。

「肌で感じるよさ」が普通にあることを幸せに思う。

さて、学校再開準備期間を経て、いよいよ週明けの月曜日から本格的に学校が再開される。

限られた時間帯でしか聞くことのなかった「子供たちの声」が、「常なる声」として帰ってくる。これまで、あたりまえだと思っていた、あたりまえでない普通。

このあたりまえでない普通を大切に、職員一同、頑張っていく所存である。

常なる磐

つねなる いわ

令和2年6月12日(金)号

◇ 見て学び、学びを生かして行動する「つながる学び」

学校再開から2週間。

学校に、子供たちの澆漑（はつらつ）とした姿と笑顔、真剣に学ぶ姿、元気な声に戻ってきた。この2週間、我々は、貴重なあたりまえの幸せを実感している。

6月1日、隔日の半日登校から給食ありの全日登校に移行した。学校の本格再開に際し、子供たちの体力的、精神的両面の疲労が心配されたが、なんと第1週は、「欠席者なし」で週を終えた。家庭の支援はもちろんのこと、子供たちが備えるたくましさもあるが、学校生活における前向きな気持ちを支える大きな要因は、学級の友達や先輩、後輩、そして教師の存在といった人的環境であるといえる。

友達との関係を察し、さりげない支援で関係性を高め、行動を促すのが教師の役割であるが、本校は小規模校であるがゆえに「察する」場面を教師がタイムリーに拾い、支援につなげられやすいといえる。それでも、本校の教師は「察し」「支援」の双方がいずれも巧みで、本校の特性を生かした的確な支援により、子供を伸ばし、子供を鍛えている。本当に心強い。

子供の鍛えによる伸長がよく分かるのが、全校児童が一堂に会する場面である。

月曜日に行われる朝会（全校集会）では、入学間もない1年生も無言で入場し、きちんと聞く姿勢を作ることができている。これは、上級生が先に入場し、会の雰囲気を作っていることが大きい。6年生をはじめとする上級生は、下級生に範を示すことを意識しており、自身がこれまでの見てきた先輩の姿を求め、見て学んだ経験を肥やしとしながら、立場をわきまえ、すべきことを心得て行動できる。ただし、ここに至るまでの教師のさりげない支援も忘れてはならない。

さらに、体操座りで動かずに座り続けられるのは、日々の教室での担任の指導によるところが大きい。正しく美しい座り方に、日常の教師の指導が見て取れる。

身体測定では、学年を分散させた班を作り、班ごとに検査を行う。上級生が前後で下級生を挟んだ形での移動は通学団と同じで、上級生は下級生を気遣い、下級生は上級生の指示にしっかり従う。

先輩の指示を聞いて1・2年生が頑張ろうとしている姿は微笑ましい。中学年の3・4年生は、上級生の様子をしっかりと目に焼き付けて上級生になるための準備。そして、まさに後輩をけん引する5・6年生は、本当に頼もしい。

こうして本校は、小規模校の特性を生かして教師が関わりを演出し、様々な関わり合いを通した「つながる学び」により、子供たち自身で学び続けている。

常なる磐

つねなる いわ

令和2年6月19日(金)号

◇ 奉仕の心

6月に入り、学校の景色が様変わりした。校庭である。日を追うごとに緑色を増していく。「さすがに緑豊かな山あいの中にある学校だ」などと、のんきなことは言ってはられない。それほど変化は急速なのだ。さらに今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大予防対策として学校が休校になったほか、学校開放が全面禁止となり、校庭を使用しない時期が長かったことも雑草の急速な生長を後押しした。週に1回、清掃の時間を利用し、全校生徒で校庭の草取りを行うのだが、とてもとても追いつかない。

そんな折、「6月末の航空写真の撮影に間に合うように、地域(寿会と社教委員)で校庭の草取りを協力しましょうか」と、中根社教委員長さんから提案があった。タイミングの良さに感服。まさに、救いの神の声である。

続いて、「草取りをやっていただくだけでは、地域に申し訳ない。児童も参加させたいが密も避けたい。ならば、4・5・6年の児童で部活動の時間を使って草取りを行わせたい」と部活動担当者から申し入れがあった。この考えも嬉しい。

16日(火)、部活動開始とともに、担当者の指示を受けて児童による草取りが始まった。トラック沿いに間隔を空けて並び、中腰になっての草取り。時間にして約30分。黙々と草取り。誰一人、無駄ごとをしない。

児童の献身的な姿に驚き、嬉しさがこみ上げる。こんなに黙々と草取りを行う子供たちを目の当たりにしたのは、初めてと言ってもよい。



4年生は、部活動が始まって3日目。技能は、まだまだ未熟かもしれないが、奉仕の心、部活動に臨む心は、もうすっかり一人前であることを姿で証明してみせた。

緑色の範囲が小さくなったのは僅かではあるが、本校の子供たちの奉仕の心は計り知れなく広い。

常なる磐

つねなる いわ

令和2年6月26日(金)号

◇ あたりまえ②

6月第2週の朝会（全校集会）。 児童への話は、「あたりまえ」について。

本格的に学校が始まり、先週は、月曜日から金曜日まで6時間授業でした。その中で、全員が欠席なしで登校できました。 本当によく頑張りました。毎日登校するには、今は少し力が要ります。 もう少し頑張ってください。この頑張りは、もうじき「あたりまえ」に感じてきます。

今日は、「あたりまえ」についての話をします。

何でも「あたりまえ」になるまでには、自分で意識することと、少しの頑張りが必要です。でも、続けていると、意識しなくても、頑張らなくてもできるようになります。これが「あたりまえ」です。

「あたりまえ」になるまでは、少し意識をして、少し頑張る。そうすると、大きな声で挨拶をすることも、間違えてもいいからたくさん挙手することも、靴箱の靴やトイレのスリッパを整頓することも、毎日学校に登校することも、意識しなくても、頑張らなくても、できるようになります。意識しなくても、頑張らなくても、「あたりまえ」にできるようになります。

この「あたりまえ」を増やしていくことが大事です。

中学生になっても、高校生になっても、大人になっても、おじいさんやおばあさんになっても、「あたりまえ」を増やしていく。

あなたの「あたりまえ」は何ですか。 今度、聞きますから、教えてください。

そして、あなたの「あたりまえ」を増やしていきましょう。

人は、【「あたりまえ」のことが「あたりまえ」にできるようになる】ことで、徳を積むことができる。公共(徳)心を高め、自然に良識のレベルが上がっていく。

例えば、自分がトイレで使用したスリッパを「あたりまえ」に整頓できるようになると、それ以外のスリッパを整えたり、トイレの前を通りかかっただけで、乱れたスリッパを整えたりできるようになる。つまり、行動に磨きがかかる。

- ・自分の中の「あたりまえ」を増やしていく。
 - ・友の「あたりまえ」に刺激を受け、友の「あたりまえ」を自分の力にしていく。
 - ・学級の「あたりまえ」について考え、集団の「あたりまえ」を増やしていく。
 - ・個や学級の小さな「あたりまえ」が、学校の「あたりまえ」になっていく。
- 「あたりまえ」をたくさん備える子供が集う学校にしていくのが私の願いである。

常なる磐

つねなる いわ

令和2年7月3日（金）号

◇ 目で 耳で 自然を嗜む

今年の「梅雨」明けは、例年よりもかなり早いとのこと。

「梅」の花が咲く季節どころか、「梅」の実の収穫時でさえとっくに過ぎ去ってしまっているのに「梅」の文字が使われている「梅雨」。その語源を紐解いてみた。

「梅雨」に「梅」があるのは、言葉が伝来した中国に起因している。けれども、中国から「雨期を表す言葉」として伝わったのは「つゆ」ではなく、「ばいう」。もともと「雨によって黴（「かび」：音読「ばい」）が生えやすい季節」から「黴雨」のところ、その語感の悪さから、中国で「梅」を当て字として用いた「梅雨（ばいう）」が、江戸時代の日本に伝わったとのこと。確かに今も「ばいう」とも読む。

日本に伝わった「梅雨（ばいう）」。これが「梅雨（つゆ）」となるのは、雨期による雨で木々に付く「露（つゆ）」にある。季節を象徴する「露」と、その音感の響きのよさ、日本特有の詩情から、「梅雨」に「つゆ」を当てたとの説がある。つまり、中国当て字の「梅雨」に、日本でも「つゆ」と字を当てたのである。中国と日本の両国にまたがり、本国で醸成されたのが「梅雨（つゆ）」ということ。

さて、今年の梅雨はこれまで味わったことのない詩情を味わい、楽しむことができた。常磐の地でなければ、知ることでできなかった発見が新鮮であった。

その一つは、雨の降り初めに山間のところどころから立ち上る「靄（もや）」。雨が降り、地面や木の幹葉に落ちた露が温められ、水蒸気となって立ち上るのだ。おそらく「霧」の原理だろう。遠目は靄が濃くかかり、近場では靄がはっきり見える。この自然現象が生み出すコントラストが景色を荘厳にさせている。梅雨の雨降り時、校舎から一歩出れば、こんな光景がいつでも見られる。

二つ目は雨音。雨降りの時は、体育館裏の雨音が美しい。文字であらわすと、『さわ さわ さわ さわ さわ さわ さわ さわ さわ さわ』…表現が難しい。初めは水の流れる音かと思ったが、少しニュアンスが異なる。そこで耳を澄ます。

『さわ さわ さわ さわ さわ さわ さわ さわ さわ さわ』

落ちてくる雨が、青みと勢いを増して伸びる葉に当たって生ずるわずかな音。これが幾重にも重なって、木々がハーモニーを奏でているのだ。

雨量が異なると音が変わる。雨粒の大小で変化する常東ランドの音色。

目で 耳で 自然を嗜む。 何年もかけて溜まったストレスが抜けていくようだ。

常なる磐

つねなる いわ

令和2年7月10日(金)号

◇ 変化という成長

見慣れた景色の変化は、注意深く観察していないと気づくことはできないが、子供たちの成長にかかわる変化は、たとえ変化の度合いが小さくても、容易に気づくことができるから不思議だ。目に見えにくい子供の心の部分の成長が、表出された形となって表れる現象を見取ることができた時は、何とも言えない嬉しさが込み上げる。

昇降口の景色が変わってきた。この景色がとてもよい。

景色の変化に、変化をもたらした背景を想像し、重ね合わせていくことで、たくさんの要素が絡んで織り成す「変化の深さ」を見出すことができる。

きちんと手を添えて靴箱に納められた靴に、子供たちの成長がはっきり見える。子供たちの心を耕す担任の地道な指導はもちろんあるが、担任の話を受け止めて行動に移す「子供が備える素直さ」こそ、変化の最大の要因である。これは、生を受けて以降、日常生活の中で養われ、培ってきた家庭教育によるものが大きい。保護者の確かな家庭教育力が学校教育を支えてくれているのだ。感謝である。

最も価値ある支えは、上級生のさりげない行動だ。後輩の靴に手を添えて正す。教師が行う学校はある。しかし、こうした児童間の、さらに学年を超えた自浄を促す活動は例を見ない。心が洗われる。

雨の日は見逃せない景色がある。

下足が長靴に変わるが、大きな長靴を限られたスペースの靴箱に巧みにしまう。長靴の上部を棚に引っ掛けたり、横に入れたりするなど、試行錯誤の工夫がある。

もう一つは、雨傘の整頓である。

雨傘が傘立てに一行にきちんと並ぶのは、傘立てにも靴箱と同じように記名表記を施す担任のさりげない支援の賜物だ。ここまで丁寧に対応する学校はあまりないはずであるが、小規模校の特性を生かした支援の代表であるともいえる。

傘の整頓以上に価値があるのは、傘地がバンドでまとめられていること。なぜなら、バンド止めは複数の行程を要するのと同時に、水滴で手が濡れるという負の要素を覚悟して行うことにある。手が濡れれば手を拭く必要があるし、手が汚れば、手洗いも加わる。これがふつうにできる、【あたりまえ】にできるのは、公德心を優先する心が育っている証なのである。

常なる磐

つねなる いわ

令和2年7月17日(金)号

◇ あたりまえ③

7月6日、3回目の朝会（全校集会）。 児童への話は、「あたりまえ」の続き。

この前の集会では、「あたりまえ」の話をしました。

よいことを「あたりまえ」にするには、少しの頑張り意識が大切でした。そして続けていると、意識しなくても、頑張らなくてもできるようになります。これが「あたりまえ」です。でも、「あたりまえ」には、「よくないあたりまえ」もあります。

たとえば、宿題を忘れてしまった時、前の日にやらなかった時、『いけなかったな』と反省します。反省をし、気持ちを入れ直して、もう一回頑張ればいいのですが、『昨日もやらなかったから、今日もやらなくていいや。』と2日続けて宿題をやらないと、『いけなかったな』という反省の気持ちが、前の日より小さく、小さくなります。そして3日続けて宿題をやらないと、宿題をやらないことが「あたりまえ」になります。これが「よくないあたりまえ」です。

「よいことをあたりまえにする」には、少しの頑張り意識が大切ですが、「よくないあたりまえ」は、やらないこと、手を抜くことで「あたりまえ」になるのです。「よくないことがあたりまえになる」のは、たいへん危険なことです。

そして、「頑張る（やる）」のか「手を抜く（やらない）」のかは、自分で決めているのです。

挨拶をしないしていると、挨拶をしないことが「あたりまえ」になります。靴やトイレのスリッパをそろえないと、そろえないことが「あたりまえ」になります。授業でずっと手を挙げないと、手を挙げないことが「あたりまえ」になります。

毎朝、あなたは、家族に「あたりまえ」に挨拶をしていますか。あなたの「おはよう」の一言で、「元気なのか」「体調が悪いのか」「心配なことがあるのか」家族はあなたの様子が分かるくらい、あなたのことを気にかけてくれていますよ。

「よくないあたりまえ」は、なくしていきましょう。
「よいあたりまえ」を、どんどん増やしていきましょう。

よくないあたりまえは、互いに気をつけながら自浄作用によってなくしていく。

- ・自分の中の「あたりまえ」を増やしていく。
 - ・友の「あたりまえ」に刺激を受け、友の「あたりまえ」を自分の力にしていく。
 - ・学級の「あたりまえ」について考え、集団の「あたりまえ」を増やしていく。
 - ・個や学級の小さな「あたりまえ」が、学校の「あたりまえ」になっていく。
- 「あたりまえ」をたくさん備える子供が集う学校にしていくのが私の願いである。

常なる磐

つねなる いわ

令和2年7月17日(金)号

◇ 美しいもの

高等学校では、甲子園の代替大会が全国各地で始まった。聞くところによると、野球だけでなく、その他のいくつかの競技も、開催方法を工夫して行うとのこと。球児や競技者の思いを汲んだ各団体と関係者の粋な取り計らいに、心が温まる。

さて、岡崎市では、明日から中学校市長杯が開幕する。コロナ禍の重苦しいニュースが続くさ中のホットな話題に、中学校のホームページも市長杯一色である。中学生の高まる胸の音が聞こえてきそうだ。

全国大会をはじめとする各大会、各市町大会の中止が早々と決定される中、子供たちのために市内大会だけは開催しようと尽力していただいた市教育委員会、そして市体育部会には感謝しかない。全国では、近頃の多雨による水災害により、危険と隣り合わせで日常生活を送っている地域もある。岡崎市の中学生には、そうした地区で必死に毎日の生活を送る同世代の若者の思いも感じながら、最後の夏の大会に臨んでほしいものである。大会の実現の喜びに満ちた活力ある姿だけではなく、2年半の部活動を通して心身を鍛え、逞しく成長した姿に宿る「健全な美しさ」を、保護者や仲間、後輩たちに見せることができるであろう。

雨続きといえ、本校の部活動も雨の影響で体育館での活動ばかり。制限が多く、十分な活動ができない中、子供たちはよく頑張っている。

水曜日は本当に久しぶりの屋外での練習。思う存分に体を動かす姿に、環境の大切さを改めて実感する。

ひととおりの活動を終えたところで、とてもよい光景を見ることができた。

数名の児童が、重い鉄製トンボとブラシを携え、運動場の整備に取り掛かった。トラック沿いと直線コースに上手に別れての締めくくり活動。

そう。練習を終えたら部活動終了ではない。活動に使用した場所を整えて、締めくくりの挨拶をして、部活動の終了。大正解だ。

それにしても整備の仕方が上手で、手際がよい。

トンボで地面の状態を平滑化し、そのあとブラシでさらに整える。よく見ると、上級生が方法の指示を出していた。6年生は、2年の経験を生かして伝えていた。

グラウンド整備を終えて、運動場は使用前よりも美しくなった。でも伝えておく。それよりも美しくなったのは、整備の携わった君たち自身の「心」なのである。